



我れ思想戦に勝てり

戰時調査室 常務理事 堀義貴

悔ひなき戦

敵側が廣大な太平洋水域で僅かばかり進攻を遂げたので、も早戦の半分ぐらゐる勝つたかのやうな幻覺を起し、驕慢の祝盃を舉げ始めてゐる昨今、思想方面では我が方が一億一心、愈々不退轉の結束を固うするのと對比し、敵陣營が反對に浮足立ち、且つその與國間に利害關係の相剋摩擦が蔽ひ隠せず苦悶焦燥の狀を呈するに至つたのは皮肉のやうであるが、實は是れ、當然起るべきことが起つたに過ぎないのであつて、毫も異とするに足らない。

敵戦争目的の表

大東亞戦争は表面の形はこちらで仕掛けたやうに見えるけれどもこれは日本が邦家、民族存亡の瀬戸際に立たされて始めて颯起した謂はば受けて立つた相撲であり、即ち畏くも大詔に「洵ニ巴ムヲ得サルモノアリ」と宣らせられた所以である。敵アメリカにおいてすら開戦直前の外交経過を説明する白書が出てからは日本颯起の無理からざるを認むる議論が散見するに至つてゐるのである。

心細い話ばかりであつたが、それでも決然として起つたのは戦争の大義名分が一億國民の一人々々の頭上に良心の無上命令として壓しかぶさつて来て、この義戦、幸夫何ぞ吾れを見捨てんやの信念となつて突進し、かくしてかの胸すくばかりの緒戦期の戦果となつたのではないか。

我が戦意の基くところ、しかく簡明直截であり、又東亞の諸國を我れとの共同戦線に繋ぐべき共通戦争目的も所謂大東亞宣言に餘蘊なく盡くされてをり、しかもこの戦争目的は國內の各國民に對し、ただ戦争が都合よく進展しえへすれば、何の牴觸もなく達成するといふ見通しが保證せられてゐることは誠に驚嘆すべき我が思想戦の陣容ではないか。

これに對し、敵方はどうであるか。先づ指摘すべきは敵側が自ら掲げて、その戦争目的と稱するものは全く表面だけの看板に過ぎぬことである。一九四一年の大西洋憲章と稱するものが初心な世間衆には英米の戦争目標と考へられ

開戦前に日本側の物的戦力の見通しは、例へば石油は一年分あるとか、ないとか、又鐵はアメリカの何十分の一とかいふやうな誠に

號八十七第 昭和三十九年九月十五日 發行日 月三年九十和昭 行發日五十月一 錢五部一價定 錢十六(共稅)分年一 一才田杉 編輯人 國公谷比日臨町都東京 社信通盟同 出本 價々會版二第 八〇〇〇 價々會版二第 (八〇二一)

條章を英米が實際なし、又なさんとしつあるところと對比するなら彼等民主政治國の政客が選舉演説で公約せるものを後日恬として忘れて恥ぢざるやりに彷彿たるものあり本憲章は今や全くの空文であることを發見するであらう。全文八ヶ條から成る同憲章の冒頭にある

第一條 兩國は領土的、其の他の増大を求めず
第二條 兩國は關係國民の自由を表明せる希望と一致せざる領土的變更の行はるることを欲せず
第三條 兩國は一切の國民が其の下に生活せんとする政體を選擇する權利を尊重す。兩國は主權及自治を強奪せられたる者に主權及自治が返還せらるることを希望す

の三ヶ條は實に本憲章の骨子をなすものであるが、其の實際の適用の有様はどうであるか。第一條に關しては戦後太平洋上の諸島嶼にアメリカの食指が動いてゐることはアメリカ議會其の他に表れた議論で明白であるし、現にロンドン電報は近くアメリカ國務次官渡英の用向の一部がこの問題に就てであると報じてゐる。

又アメリカは世界最大の産油國でありながら、なほ満足せず、サウヂ・アラビアに政府自ら石油の利權を持たうとして議會で問題を起してゐるがこれは憲章第一條の「其の他の増大」に該當しないか。第二條に就ては今次大戦の發端はポーランド國內で猫額大のダン

チヒに對するドイツの要求を不當として始まつたものであるのに、今やソ聯とポーランド亡命政權との間に起つた東部國境全體に亘る死活的の葛藤にイギリス政府は恬として亡命政府を見捨てんとしてゐるのは本憲章の根本的な蹂躪ではないか。

第三條に就ては、インド四億の民衆がイギリスの壓制に不満で、夙に自治領の地位を要求せるに對し、種々の口實を設けてこれを拒否し、大東亞戦争開始直後ガンヂー翁以下の會議派數百名を監禁し、政治運動の抑壓に専念してゐるの明白に憲章無視の態度である。

大西洋憲章の骨子たるこの三條章を蹂躪した以上、この金看板は反古紙同然であり敵は全く無名の師に墮したものと云ふべきである

敵戦争目的の裏

敵の表看板が前記の通り七花八裂の状態であるとしても、それでは外に隠された眞の戦争目的はなにか、曰く、それは大にある。即ち勢力均衡といふドン栗對立の國際態勢を釘付けにして、英米に都合よき世界の現状を維持して行かう、それがためには歐洲でも、亞細亞でも圖抜けて展びんとする國

があるれば、これを抑へるために周圍の有らゆるドン栗の國を糾合し自分の味方にして新興國を征伐す。これが打ち割つた彼等の肚の底である。

而してこの政策の本案はイギリスであつて、實際イギリス帝國にとつては、これが生存の必要から本能的に生れる唯一最良の政治的立場と、その國土の包容する豐富的な資源からいつて何もあわててかかる政策に血道を擡げる必要はない。ただイギリスのこの政策に便

乗することに世界覇者の地位が糊ボタ的に自分の上に落ちて来る豫想から一口乗つてゐるに過ぎない。ところが戦を四年も續ける内にイギリスの國力が到底中心になつてこの大芝居を打つに耐へないことを暴露し來つたのである。

即ち與國として米・ソ・重慶等を抱き込んだものの、アメリカの威勢が到るところに増大するに引換へ、イギリス自ら統率の采配を買つて出たビルマでの不況に對してはアメリカや重慶から嫌味をいはれ通しであり、インドの獨立派までがアメリカに秋波を送り兼ねまじき情勢である。

他方歐洲ではソ聯の要求する第二戰線は未だ芽を出さず、イタリヤの方は膠着し、獨りソ聯が擔當する東部戰線だけが逐次前進してこれではドイツを抑へるための戦争が意外にもドイツよりは更に手に負へぬ相手であるソ聯の怒濤のごとき西歐洲への進出を招來する結果となることのはつきりして來たので、このところイギリスが左顧右盼を始めるのは當然といはねばならぬ。

由來外交は複雑なのがその本質であることを理解し、必要に應じ鈍重の態度をかなくり捨てて豹變するのイギリスの十八番藝である。日清戦争も黄海海戦を界にはつきり支那から日本に乘換へ、第一次歐洲大戦後は二十年の盟友日本を賣つてアメリカに付き、又必要に應じドイツとフランスとを巧みに兩手の手玉に使つて歐大陸の勢力均衡劇を二十年間打ち續けたイギリスである。今次の戦争目標に懷疑の芽生えをみた國民が何所まで第二戰線の犠牲を忍び得るであらうか。主役のイギリスが生温い色をみせたら、どうしてイギリス以上の犠牲を負ふこと必至の大冒險にアメリカが何時までも御相

件するか。更に敵方にとつての難問は西亞細亞に澎湃として起りつつあるアラブ聯盟に英米が如何に棍をふるか、又アメリカ大陸の南隅にはアメリカの汎米運動に異を樹てんとする一群の國があること等である。かく看來れば英米の眼玉のにらみだけでは中々引込まぬ竹槍旗が歐に、亞に、米に、あちこちに簇立せんとしつある。我が方の一絲紊れぬ大東亞圈の思想陣營から展望するとき、相手の陣營は誠に殺氣横溢の概ありといふべきである。

思想面にも内線作戦
昨今の戦局で武力の面を見ると與國ドイツは東方戰線整理の實現に伴ひ漸次内線に據つて機動力を充分發揮出来る地位に置かれたもので、今後彼れの打つ手如何は我等をして大なる期待を抱かしめるものがある。これに對し我が大東亞方面の戦局は輸送力と飛行機の充實さへみれば内線作戦の十二分の作用發揮を見るだらう。

他方思想戦方面にあつては日本が有する國內統後の絶對的強味は大東亞圈内與國相互間の水も漏らさぬ協力關係と相俟つて敵の虚を突く奔放自在の内線作戦の妙味を發揮し得る地位に置かれてゐる。有史以來始めて當面した幾多問題の逼迫緊張にも拘らず、わが統後國民の小搖ぎだもせぬ立派さは古今東西その類例を見ざる、流石わが國體の有難さである。

この國內統後と先般の大東亞會議に象徴せられた我が方與國との緊密な提携を更に鞏めた上、思想戦の有らゆる力を集結して浮足立ち始めた敵陣營に總攻撃をかける時機が切迫しつある。思想戦の最も重要な部門を擔當する同盟五千同志の健闘を祈るや切である。

辭令

編輯局整理部 藤川 佐吉

華南總局長ヲ命ス 編輯局勤務副參事 宮本 基

華中總局長ヲ命ス 編輯局勤務副參事 橫田 實

海外局勤務社員 畑井 勇

伯林支局勤務 本田 良介

復職ヲ命ス(一月一日附) 編輯局整理 田中正太郎

編輯局勤務副參事 拓植 孝八

編輯局勤務副參事 三浦 良知

編輯局勤務副參事 小黒 大州

編輯局勤務副參事 原子林二郎

編輯局外信部次長ヲ命ス 參事 長島 又男

戰時調查室理事ヲ命ス 戰時調查室 倉田 正一

戰時調查室南 方部長ヲ命ス

戰時調查室南方部長ヲ解ク北京駐在ヲ命ス戰時調查室理事如故(二月八日附各通)

經濟局內經部金證券主任兼務ヲ命ス 經濟局內經部 板垣 武男

大阪支社總務部長ヲ命ス 大阪支社總務部 岡本 一男

大阪支社總務部長ヲ命ス 大阪支社總務部 武田 文男

大阪支社總務部長兼務ヲ命ス 大阪支社總務部 結束武二郎

大阪支社總務部長兼務ヲ命ス 大阪支社總務部 兒玉 正彦

大阪支社總務部長兼務ヲ命ス 大阪支社總務部 河村 時雄

大阪支社總務部長兼務ヲ命ス 大阪支社總務部 森山 末松

中華總社總務部長兼務ヲ命ス 中華總社總務部 佐々木健兒

中華總社總務部長兼務ヲ命ス 中華總社總務部 帆足 升

華中總局長兼務ヲ命ス 華中總局 岩本 清

華北總局長兼務ヲ命ス 華北總局 戶澤 隆二

華北總局長兼務ヲ命ス 華北總局 石崎 信治

華北總局長兼務ヲ命ス 華北總局 濱田 八東

華南總局長ヲ命ス 華南總局 松本 猛

華北總局長ヲ命ス 華北總局 大野 誠

華北總局長ヲ命ス 華北總局 伊東 瑛

華北總局長ヲ命ス 華北總局 利子 新城

華北總局長ヲ命ス 華北總局 倉根 基次

華北總局長ヲ命ス 華北總局 本多 孝平

華北總局長ヲ命ス 華北總局 中島 基行

華北總局長ヲ命ス 華北總局 佐藤 武美

華北總局長ヲ命ス 華北總局 立川 光夫

華北總局長ヲ命ス 華北總局 不老 正惠

華北總局長ヲ命ス 華北總局 岩田 末三

華北總局長ヲ命ス 華北總局 宗久 仁

華北總局長ヲ命ス 華北總局 德永 康信

華北總局長ヲ命ス 華北總局 辻 正二

岡山支局勤務ヲ命ス 岡山支局 大友 キヨ

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 古川 貞市

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 小川 三郎

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 小笠原 進

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 古澤 孝

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 關 瑞男

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 濱谷 龍男

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 大澤 滋

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 中山 一郎

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 中田左郎男

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 三木 嘉隆

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 堂添 慶瑞

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 井上登喜惠

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 河井 正博

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 川島秀太郎

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 東條 一

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 鏡 貞子

天津支局勤務ヲ命ス 天津支局 廣澤 綾子

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 岡島 敏彦

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 小倉支局ノ事務ヲ囑託ス(二月十日附)

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 津南支局勤務 二宮 ノブ

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 編輯局同 川上美枝子

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 天津支局勤務社員 坂下 辰二

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 神戶支局勤務 太田美智子

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 大阪支社同 木下 種子

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 華中總局同 東村 種一

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 神戶支局勤務社員 中村 敬一

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 聯絡局同 岩本正太郎

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 大阪支社同 廣島 愛子

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 大阪支社同 藤原登久子

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 聯絡局同 森田 和幸

華中總局ノ事務ヲ囑託ス(二月一日附各通) 熊本支局同 藤原 キミ

本社產報事務局役員及本隊隊員名簿

過般の本社職制改革に關聯して同盟本社產報は左の通り事務局役員及び本隊各隊長、隊員の異動が行はれた。

事務局役員

- 事務局局長 塚本義隆
- 東京支部長 中住繁夫
- 總務部長 白仁進
- 訓練部長 豐島清光
- 厚生部長 竹市信康
- 技能部長 山本政常
- 青年隊總隊長 高橋與三治
- 女子隊總隊長 高橋與三治

第一大隊

- 大隊長 塚本義隆
- 隊附 松野喜作
- 第一小隊長 粕谷源藏
- 第二小隊長 杉山善之助
- 第三小隊長 神子島裕郎
- 第四小隊長 麻生林策
- 第五小隊長 長林密藏
- 第六小隊長 伊藤勝司
- 第七小隊長 浦上多彦
- 第八小隊長 岡崎幸次郎
- 第九小隊長 川島信太郎
- 第十小隊長 中住繁夫
- 第十一小隊長 植松尚男
- 第十二小隊長 相澤豐藏
- 第十三小隊長 海藤紋藏
- 第十四小隊長 田中眞一
- 第十五小隊長 日高定雄
- 第十六小隊長 關安之助
- 第十七小隊長 前農夫
- 第十八小隊長 第一小隊長
- 第十九小隊長 第二小隊長
- 第二十小隊長 中川秋三

- 中西兼隆 小笠原恒八
- 長谷川鎮吉 神志郎
- 羅輝勝藏 勇川演
- 面川平 佐久間記一郎
- 第三小隊長 飯島仁平
- 大森廣司 田中英三
- 綠川喜惣次 和田正治
- 田中石太郎 中澤吉雄
- 西村重造 中里盛一郎
- 武本清太郎 前島幸太郎
- 第四小隊長 山崎梅作 笠木重次
- 香澤穆 永頼廉之助
- 太田常雄 蓬萊實藏
- 日崎政市 田中勇
- 佐藤豐男 今野重藏
- 宮樫忠 船木重光
- 第二中隊長 田中三之助
- 隊附 瀨川伊和男
- 第一小隊長 久原育男
- 守屋文雄 綾野政治
- 日比野良夫 日下部武徳
- 手塚信夫 三浦正教
- 近藤政助 上村藤吉
- 第三中隊長 大脇慶藏
- 隊附 木口次郎
- 第一小隊長 伊藤大二
- 高岩吉 荻川選太郎
- 倉田幸次郎 小宮頼平
- 新井勝太郎 川島秀太郎
- 奧村錦之助 石井孝
- 山田良太郎 和田淳一
- 和田淳一 春日昇
- 寺尾要次郎

第二大隊

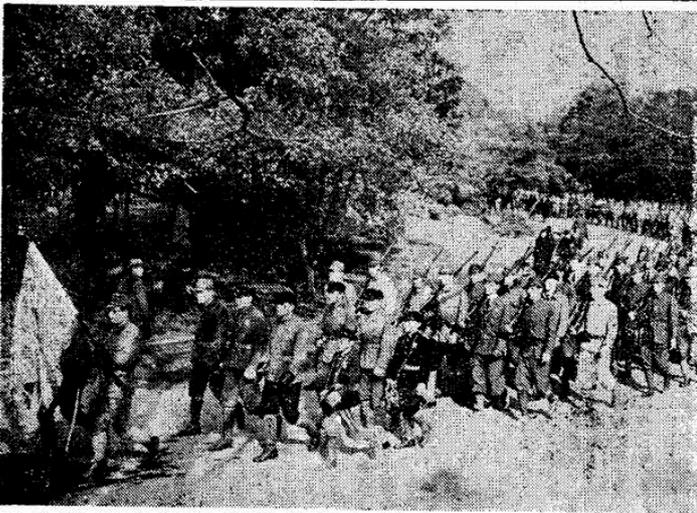
- 第一小隊長 坂井金二
- 宮村秀雄 山岡孝光
- 田中草市郎 飯田善太郎
- 菊地欽三郎 藤川覺
- 第五中隊長 村田爲五郎
- 隊附 池田雄藏
- 第一小隊長 志水清 蛇澤康夫
- 谷崎慈平 中村靜間
- 仲功 齊藤保
- 岡村治恭 前田幾千代
- 宮木昌常 武田長之助
- 中村定一 小澤武二
- 第二小隊長 大久保正太郎
- 伊藤正三 清水長輝
- 高田傳 岡澤孝晴
- 金川義人 福田兼治
- 伊藤實 高宮利彌
- 第三小隊長 巖俊緒 鹽野三郎
- 北村清一 石崎雄一
- 都築三郎 金子文治郎
- 丙堀正一 伊藤房麿
- 菊池茂 林勝郎
- 中村滋雄
- 松永二郎
- 山岡孝光
- 飯田善太郎
- 藤川覺
- 村田爲五郎
- 池田雄藏
- 蛇澤康夫
- 中村靜間
- 齊藤保
- 前田幾千代
- 武田長之助
- 小澤武二
- 大久保正太郎
- 清水長輝
- 岡澤孝晴
- 福田兼治
- 高宮利彌
- 鹽野三郎
- 石崎雄一
- 金子文治郎
- 伊藤房麿
- 林勝郎
- 高橋榮一
- 野口省吾
- 吉川吉太郎
- 久保友雄
- 淺山進一
- 齋藤金次郎
- 本田正三
- 田邊門司
- 持田富三郎
- 秋山泰造
- 玉田重吉
- 森雄次郎
- 中村要之助
- 小林總太郎
- 安井俊二
- 水野廣
- 高橋國吉
- 加藤雪雄
- 古川德太郎
- 大森吉五郎
- 新井正義
- 木村進
- 小山武夫
- 石井文治
- 中村仲康
- 古津四郎
- 遠藤七郎
- 田崎與喜衛
- 沼佐隆次
- 木村昇
- 齋藤甚一郎
- 飯塚照二
- 秋武徳次郎
- 寺山義雄
- 橫井雄一
- 妹尾忠男
- 旭寅吉
- 山崎紀雄
- 結東博治
- 光永廣
- 佐藤喜一郎
- 田中徳賢
- 福井賢
- 岡崎光一
- 高橋榮一
- 野口省吾
- 吉川吉太郎
- 久保友雄
- 淺山進一
- 齋藤金次郎
- 本田正三
- 田邊門司
- 持田富三郎
- 秋山泰造
- 玉田重吉
- 森雄次郎
- 中村要之助
- 小林總太郎
- 安井俊二
- 水野廣
- 高橋國吉
- 加藤雪雄
- 古川德太郎
- 大森吉五郎
- 新井正義
- 木村進
- 小山武夫
- 石井文治
- 中村仲康
- 古津四郎
- 遠藤七郎
- 田崎與喜衛
- 沼佐隆次
- 木村昇
- 齋藤甚一郎
- 飯塚照二
- 秋武徳次郎
- 寺山義雄
- 橫井雄一
- 妹尾忠男
- 旭寅吉
- 山崎紀雄
- 結東博治
- 光永廣
- 佐藤喜一郎
- 田中徳賢
- 福井賢
- 井關實
- 荒尾達雄
- 北原晴光
- 尾高晃
- 山田吉徳
- 有馬頼義
- 杉山修八
- 平澤直之
- 菅沼俊哉
- 小柳誠
- 松島實
- 山内啓
- 野中一郎
- 野中圭甫
- 小野田政
- 向井啓雄
- 岩佐吉兼
- 今村金衛
- 中山四郎
- 武田尚昌
- 淺野豐
- 河上遠
- 佐藤啓之
- 森本孝
- 原貢
- 中川清
- 下部清隆
- 横山英志
- 半谷高雄
- 樋口憲吉
- 伊達由夫
- 菅野庄一
- 田島昌夫
- 藤田耕三
- 柳澤賢三
- 宮澤義雄
- 木下秀夫
- 原子林二郎
- 渡邊忠恕
- 古野忠
- 大坪正治
- 須藤信光
- 圓谷文夫
- 千葉愛雄
- 上郷文雄
- 黒川四郎
- 石川良一
- 關口榮三
- 杉本恒彦
- 宮川卓二
- 木名額智
- 平野宗義
- 伊藤幹
- 長田政次郎
- 大村泰三
- 荻瀨敏
- 木原健男
- 長林健一
- 窪田繁重
- 長尾睦也
- 成田安賢
- 清山憲
- 古澤武夫
- 早川泰雄
- 塚原嘉平治
- 武田尚昌
- 淺野豐
- 河上遠
- 佐藤啓之
- 森本孝
- 原貢
- 中川清
- 下部清隆
- 横山英志
- 半谷高雄
- 樋口憲吉
- 伊達由夫
- 菅野庄一
- 田島昌夫
- 藤田耕三
- 柳澤賢三
- 宮澤義雄
- 木下秀夫
- 原子林二郎
- 渡邊忠恕
- 古野忠
- 大坪正治
- 須藤信光
- 圓谷文夫

大平安孝

- 第一小隊長 大西保太郎
- 岩崎正雄 勝田丙吉
- 小寺信重 近藤正彦
- 伊藤壽雄 岡本英雄
- 石割淳一郎 赤堀赤心
- 小島敬三郎 村上達
- 第二中隊長 大屋久壽雄
- 隊附 篠原滋
- 第一小隊長 深澤幹藏
- 菊地幸作 遠藤七郎
- 上原正吉 田崎與喜衛
- 第二小隊長 沼佐隆次
- 木田正夫 木村昇
- 井上庄二郎 齋藤甚一郎
- 荒川利男 飯塚照二
- 幡野博一 秋武徳次郎
- 嘉納履方 寺山義雄
- 岡田博 橫井雄一
- 第三中隊長 三村完二
- 遠藤晋 妹尾忠男
- 友松敏夫 旭寅吉
- 門脇誠 山崎紀雄
- 渡邊孟次 結東博治
- 佐藤喜一郎 光永廣
- 田中徳賢 福井賢
- 第一小隊長 井關實
- 荒尾達雄 黒川四郎
- 北原晴光 石川良一
- 尾高晃 關口榮三
- 山田吉徳 杉本恒彦
- 有馬頼義 宮川卓二
- 杉山修八 木名額智
- 平澤直之 平野宗義
- 菅沼俊哉 伊藤幹
- 小柳誠 長田政次郎
- 松島實 大村泰三
- 山内啓 荻瀨敏
- 野中一郎 木原健男
- 野中圭甫 長林健一
- 小野田政 窪田繁重
- 向井啓雄 長尾睦也
- 岩佐吉兼 成田安賢
- 今村金衛 清山憲
- 中山四郎 古澤武夫
- 武田尚昌 早川泰雄
- 淺野豐 塚原嘉平治
- 河上遠 武田尚昌
- 佐藤啓之 森本孝
- 原貢 中川清
- 下部清隆 横山英志
- 半谷高雄 樋口憲吉
- 伊達由夫 菅野庄一
- 田島昌夫 藤田耕三
- 柳澤賢三 柳澤賢三
- 宮澤義雄 柳澤賢三
- 木下秀夫 柳澤賢三
- 原子林二郎 柳澤賢三
- 渡邊忠恕 柳澤賢三
- 古野忠 柳澤賢三
- 大坪正治 柳澤賢三
- 須藤信光 柳澤賢三
- 圓谷文夫 柳澤賢三

第三大隊

- 第一小隊長 初見喜八郎
- 海野稔 堀象
- 武井武夫 大澤滋
- 隊附 藤井信次郎
- 伊藤永止 相澤義信
- 鈴木茂 伊藤永止
- 第一中隊長 同
- 第一小隊長 悟道照夫
- 中野正光 祇川親眞
- 岩本武士 北方時男
- 武田明 白井秀光
- 長島國彦 佐野誠一
- 高木凱人 齋田弘
- 横山義衛 岸村義夫
- 西井武好 玉井孝
- 第二小隊長 笹孝貞夫
- 前田喜兵衛 前田喜兵衛
- 福田正義 石黒真代治
- 笹山勇 石井淳吉
- 兒島又喜 榑秀雄
- 箕浦信太郎 宮地誠三郎
- 吉武雪生 門馬孝一
- 上澤光司 野間正二
- 豊田稔 内藤教
- 植草市太郎 中村實
- 第三小隊長 日野晴雄
- 阿部隆 眞船弘一
- 三枝政則 番中喜七郎
- 前田波三 高井實
- 岡田貞藏 川井弘彦
- 志知健一 東條一
- 喜多原星郎 倉根基次
- 高島正太郎 石井彰
- 朝倉隆 武者幸四郎
- 足立彰 林一郎
- 中野忠則 關口政男
- 戸塚一郎 木村均容
- 松江智壽
- 堀義貴
- 加藤萬壽男



陸軍記念日を
二日の後に控へ
た三月八日の大
詔奉戴日にあた
り、本社産報本
隊、郷軍同盟分
會、産報女子隊
は金色燦然たる
社標あだやかな
眞紅の大社旗を
先頭に會旗、隊
旗を朝の微風に
そよめかせつゝ、
日比谷公園廣場

大詔奉戴日に宮城前行進
郷軍同盟分會武装で参加

から二重橋御前まで往復大行進を
行つた。
この朝七時三十分、各隊それぞ
れ所定の位置に整列する。みれば
女子隊は殆んど黒一色の乙型標準
服或は洋装に身を固め、決戦下の
思想戦娘軍の決意の程をしる。ば
せて、ゆかしくも雄々しい姿であ
る。戦闘帽の下から白髪をのぞか
せた隊員もある産報本隊員の決戦
服装はさらに一段の戦闘色を陰見
せしめる。郷軍分會は既に完全な
軍装だ。本物そっくりの擬銃、本
物の銃剣、弾入を吊したバンド、

白仁中尉が火を吐くやうな鋭い號
令を發すれば、各班一分の隙もな
く、きびきびと行動する。
かくて四列隊で長蛇の大行進
に移り、日比谷公園廣場を出て海
軍省裏に出で、二重橋前へと肅々
進軍が續く。宮城前で整列を改め
た各隊は喇叭隊の吹奏に従ひ捧げ
銃、撃手の禮をもつて遙拜の誠意
を捧げ、聖壽萬歳を祈念し奉る。
郷軍、産報本隊、女子隊の順で
本社前廣場に歸つた各隊が廣々い
つばいにコの字型に大きく堵列す
れば、社長は歩を運び撃手をもつ
て閱兵される。次いで各隊の分列閱
兵あつて春日のどけき日比谷原頭
緊張の報道戰士七百は直ちに戰場
配置に向つて散つて行つた。時に
午前八時五十分。

鷹嘴 壽

大隊長 瀧田 基
隊附 林十水而樂生
磯田小四郎
福井 輝三
周藤 清
安達 三郎
遠藤 正三
塚本 松哉
細田 正雄
石本 友治

第一小隊長 大鹿 正一
山本 留吉
徳山 辰之
松本 茂
後藤 國雄

第二小隊長 加藤 良助
長井 覺
今井 幹泰
内田 貞雄
宮崎 光夫

第三小隊長 宮崎 光夫

第四小隊長 隊附

第一小隊長 松岡伊一郎
菊地久太郎
宮内季四郎
服部 鈞
中村 一

第二小隊長 竹中 三郎
竹市 信康
松尾 信
大島 惣平
星野 又三
國頭 喜治
中野 武則

第二小隊長 中井延次郎
佐藤善三郎
石井 英二
柳 吉松
白石 友市
山村喜左三
高野小次郎
大富 信二
竹内 豊
佐藤 哲郎
上垣 三之
阿部 重治
大塚 貞夫
林 源雄
横瀬 義雄
鈴木 鐵男
鈴木 文治
伊藤安次郎
和田 芳郎
尾崎 義夫
今泉善次郎
三浦 嘉平
吉田 正隆
厨川 實孝
丸山 益郎
山縣 正
大塚 貞夫
阿部 重治
上垣 三之
佐藤 哲郎
中井延次郎
佐藤善三郎
石井 英二
柳 吉松
白石 友市
山村喜左三
高野小次郎
大富 信二
竹内 豊
佐藤 哲郎
上垣 三之
阿部 重治
大塚 貞夫
林 源雄
横瀬 義雄
鈴木 鐵男
鈴木 文治
伊藤安次郎
和田 芳郎
尾崎 義夫
今泉善次郎
三浦 嘉平
吉田 正隆
厨川 實孝
丸山 益郎
山縣 正
大塚 貞夫
阿部 重治
上垣 三之
佐藤 哲郎

第一小隊長 遠藤 正三
塚本 松哉
細田 正雄
石本 友治
松本 貞男
宗像 佐奈
鈴木 俊男
宮崎 健治
大澤 正作

第二小隊長 松本 貞男
宗像 佐奈
鈴木 俊男
宮崎 健治
大澤 正作

第三小隊長 田中 耕
野口 正男
野口 猛次
澤入 猛次
田中 耕

第四小隊長 青木 主雄
野口 正男
野口 猛次
澤入 猛次
田中 耕

第五小隊長 住谷 金吉
山内 保三
柳田 莊藏
劍持 清
尾上 勇
曾我 晴行
三森 正直
進藤陽吉郎
水村 將義
山田 三郎
井坂 一夫
前田 清

第六小隊長 西村 二郎
五十嵐友幸
栗林 農夫
山崎 誠
丸山 信也
椎野 豊
下條 雄三
澤田 猛
秋山 慶幸

隊附 長谷川才次
第一中隊長 牧内 正男
秋葉 武雄
福澤 延一
長野 米夫
第二中隊長 藤原 文雄
畑井 勇
所 左太郎
高崎 正巳
第三中隊長 三牧 信夫
松田 常雄
松本 金吉
戸國 清太
奥村伊佐雄
長尾庸四郎
原邊 榮造
山内 利三
小林 寛
大星 石松
大出 正七
上出 正七
大林 秀
五月女 章
平田 泰吉
火一 羊

第四中隊長 大星 石松
大出 正七
上出 正七
大林 秀
五月女 章
平田 泰吉
火一 羊

第五中隊長 井上 勇
陸奥陽之助
安保 長春
尾崎 茂昌
藤原 謙一
巖本 莊民
渡邊 勇
岡本 茂樹

第六中隊長 三輪 武久
古屋 英男
林 尚久
大森 知之
池谷 豊
京藤 讓治
和泉 久美
佐藤 剛
大河平隆直
川本 茂雄
大村 雄治

余 振常
馮 仲
陶 厚
張 乃山
劉 毓煊
任 建中
孫 玉文
薄 志清
楊 庸民
蕭 連煥
關 熾堯
陳 宥垣

第七中隊長 井上 勇
陸奥陽之助
安保 長春
尾崎 茂昌
藤原 謙一
巖本 莊民
渡邊 勇
岡本 茂樹

第八中隊長 三輪 武久
古屋 英男
林 尚久
大森 知之
池谷 豊
京藤 讓治
和泉 久美
佐藤 剛
大河平隆直
川本 茂雄
大村 雄治

第四大隊 石部幸弼

大隊長 石部幸弼
隊附 稻本 國雄
根津 知好
中村 信
桂田 増三
中野 凡夫
山田 憲吉
西村兼次郎
關 光雄
梅原 醇一
前島千代一
加藤木 清
阿部 政衛
岡田 實
松浦 武夫
緒方和一郎
和田 五郎
池田登三郎

第一中隊長 桂田 増三
中野 凡夫
山田 憲吉
西村兼次郎
關 光雄
梅原 醇一
前島千代一
加藤木 清
阿部 政衛
岡田 實

第二中隊長 松浦 武夫
緒方和一郎
和田 五郎
池田登三郎

第三中隊長 松浦 武夫
緒方和一郎
和田 五郎
池田登三郎

第五大隊 鷹嘴 壽

大隊長 瀧田 基
隊附 林十水而樂生
磯田小四郎
福井 輝三
周藤 清
安達 三郎
遠藤 正三
塚本 松哉
細田 正雄
石本 友治

第一中隊長 大鹿 正一
山本 留吉
徳山 辰之
松本 茂
後藤 國雄

第二中隊長 加藤 良助
長井 覺
今井 幹泰
内田 貞雄
宮崎 光夫

第三中隊長 宮崎 光夫

第四中隊長 隊附

第一小隊長 松岡伊一郎
菊地久太郎
宮内季四郎
服部 鈞
中村 一

第二小隊長 竹中 三郎
竹市 信康
松尾 信
大島 惣平
星野 又三
國頭 喜治
中野 武則

第六大隊 鷹嘴 壽

大隊長 瀧田 基
隊附 林十水而樂生
磯田小四郎
福井 輝三
周藤 清
安達 三郎
遠藤 正三
塚本 松哉
細田 正雄
石本 友治

第一中隊長 大鹿 正一
山本 留吉
徳山 辰之
松本 茂
後藤 國雄

第二中隊長 加藤 良助
長井 覺
今井 幹泰
内田 貞雄
宮崎 光夫

第三中隊長 宮崎 光夫

第四中隊長 隊附

第一小隊長 松岡伊一郎
菊地久太郎
宮内季四郎
服部 鈞
中村 一

第二小隊長 竹中 三郎
竹市 信康
松尾 信
大島 惣平
星野 又三
國頭 喜治
中野 武則

第七大隊 鷹嘴 壽

大隊長 瀧田 基
隊附 林十水而樂生
磯田小四郎
福井 輝三
周藤 清
安達 三郎
遠藤 正三
塚本 松哉
細田 正雄
石本 友治

第一中隊長 大鹿 正一
山本 留吉
徳山 辰之
松本 茂
後藤 國雄

第二中隊長 加藤 良助
長井 覺
今井 幹泰
内田 貞雄
宮崎 光夫

第三中隊長 宮崎 光夫

第四中隊長 隊附

第一小隊長 松岡伊一郎
菊地久太郎
宮内季四郎
服部 鈞
中村 一

第二小隊長 竹中 三郎
竹市 信康
松尾 信
大島 惣平
星野 又三
國頭 喜治
中野 武則

南ボルネオの風光

軍政下同盟三支局の活躍

バンジエ
マンシ支局 岡崎 龜 市

同盟

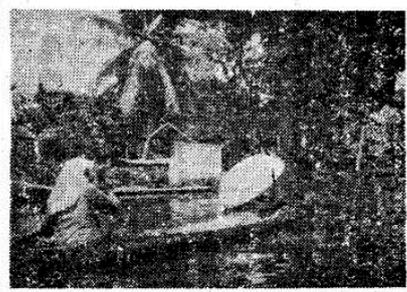
が南方海軍を政地城の南ボルネオに進出してから、この二月で滿一ヶ月を迎える。一月二日バンジエマンシにひよこり飛んできた安藤東亞部次長が「僕は嘗てボルネオとは眼と鼻のバタバヤにゐながら戦前外領として殆ど顧みられなかつたので一度も訪れる機会もなかつた」と、現在すでに三つの同盟支局が開設されてゐる南ボルネオの躍進ぶりに驚き、今昔の感に堪へぬ面持ちで述べた。

雨季

のマカッサルを後にして数人の若い人々を伴ひ、マカッサル海峡を越え、はるばるバンジエマンシに乗り込んだのは二月初めであつた。支局や共同宿舍の設置、資材の搬ぎあつめに殆ど一ヶ月を費し通信の發行を開始したのが三月十日、連日夜半一時、二時過ぎまでゴタゴタしてゐたのもその頃であつた。

四月下旬、田中支局長が元氣よく着任、支局の運営も漸く軌道に乗れ、若し諸君も仕事に熟練して来た。これで私も關係方面を自轉車でかけ廻つて、取材活動が出来るやうになつた。

續いて四月二十九日天長節を期し、パリックパン支局が通信發行を開始、ボンチャナクも吉田支局長が九月中旬着任した。もつともボンチャナクは資材や人手の都合で通信發行はやや遅れ、昨年十二月半ばから本格的に通信發行を開始した。



かくて昨年中に南ボルネオには三つの同盟支局が開設され、通信の發行に、取材方面の活躍に、同人一同眞に一體となつて、軍政の進展に不可欠の寄與をなしつつある。

の同盟の使命をよく自覺し、渾身の努力を傾けてゐる。

資材

や人手不足、交通不便による連絡の不充分、娛樂機關の皆無など、われわれの活動には幾多の險しい道が横はつてゐたけれども、誰一人報道戦士としての誇りを傷つけるものとはなかつた。それは今後ますます高められるであらう。

地圖をみるとわかるが、ジャワ海に面した南部海岸から、東支那海に面する西ボルネオの海岸地帯は一面の濕地帯である。濕地といふ先入観にとらはれ、ボルネオは何かじめじめした不健康地のやうに思ふ人もあり、未開の瘴地として進出を躊躇するものなきにしもあらず、今後の同盟人のためにその蒙を啓いておくことは、われら一日の先覺者の務めかと思ふ。

互助會報告

二月分

- △結 婚
 - 持田 富三郎 (編輯局)
 - 塚原 嘉平治 (同)
 - 埜 瀬 敬 (同)
 - 河本 貞雄 (大阪支社)
- △出 産
 - 明瀬 裕 (編輯局) 次男
 - 佐藤 剛 (海外局) 長女
 - 小泉 八郎 (編輯局) 次男
 - 藤川 佐吉 (同) 同
 - 武田 尚昌 (同) 長男
 - 松本茂登次 (マニラ支社) 同
 - 松永 二郎 (總務局) 長女
 - 高田 秀二 (編輯局) 同
 - 長尾庸四郎 (海外局) 同
 - 伊賀 徳次 (福井支局) 長男
 - 木田 秀光 (名古屋支社) 長女



なるほどバンジエマンシは海抜僅か二メートル半から三メートルぐらゐ、満潮時には大バレット河の支流であるマルタプーラ河は海水が逆流して市内の小河川に氾濫する。正に水の都である。だが一體にボルネオの河川は強烈な

太陽

熱によつて驚くほどの浄化力が強大であり、衛生上の支障はいささかもなく、かへつて原地住民の生活の基調は河川におかれてゐるといつてよい。馬來語でいふオラン・スンガイ(河川民)である。

市場

月夜の散歩も河上でも楽しむ。ここにも楽しい人間の生活があるのである。私はボルネオに進出邦人のうちに熱帯病でたはれたやうな人を知らない。マリヤもデングも邦人は殆ど罹らない。今年の紀元節には、百六十有餘の寢室を有する綜合病院がバンジエマンシに竣工をみる豫定である。内地から院長をはじめ看護婦さん達もすでに到着してゐる。同盟同志諸君、ボルネオ進出絶対に躊躇すべからず、いはんや將來の一大躍進が期待されてゐるにおいで。 (昭和十九年一月八日記)

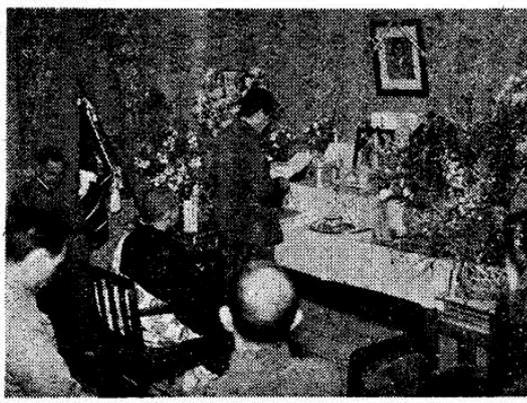
- 山本 清造 (金澤支局) 三男
- 池田 將親 (門司支局) 長男
- 瀧石 眞 (同) 長女
- 森安 千織 (神戸支局) 長男
- 笠原 正 (高松支局) 長女
- 船木 光俊 (華南總局) 長男
- 藤田 芳雄 (太原支局) 同
- 小島 三郎 (同) 長女
- 久保木菊伊 (大阪支社) 二女
- 瀨谷崎 孝 (廣島支局) 次男

- 宮村 秀雄 (總務局) 同
- 近藤 政助 (同) 同
- 藤原 文雄 (海外局) 遭難
- 徳江清太郎 (西貢支社) 同
- 津隈 教士 (同) 同
- 堂上 繁雄 (海外局) 同
- 遠藤 正三 (聯絡局) 同
- 三森 正直 (同) 同
- 松本 貞男 (同) 同
- 高柳 淳雄 (同) 病氣
- 河西 文子 (總務局) 同
- 藤川 仲雄 (名古屋支社) 同
- 藤入 義夫 (神戸支局) 同
- 笠原 正 (高松支局) 盜難
- 金村 相化 (釜山支局) 病氣
- 前川 春吉 (熊本支局) 同
- 中尾日出輝 (同) 同
- 横地 倫平 (大阪支社) 同
- 小林 徳寶 (廣島支局) 五男病氣
- 宮川 節夫 (高知支局) 夫人病氣

- △甲 慰
 - 久村 定雄 (南方總社) 祖母死亡
 - 太田 銑一 (マニラ通信部) 母同
- △退 社
 - 中島 すみ (聯絡局)
 - 于 芝 雲 (海外局)
 - 川上美枝子 (編輯局)
 - 大澤志げ子 (聯絡局)
 - 三藤 順記 (總務局)
 - 河西 文子 (同)
 - 橋川 馨 (海外局)
 - 山西 美江 (神戸支局)
 - 林 弘 (同)
 - 鹿野 正信 (大阪支社)
 - 陳 樹 (華南總局)
- 合計 件数 七十八件
金額 五、八四〇圓

思想戦最前線に散りし薫花一輪 宮内くに子嬢を悼む

昨年十一月本社から南方總社へ
轉勤して行つた數名の女子職員が
あつたが、その中の一人宮内くに
子さんは去る一月三十一日昭南の
中央病院において歸らぬ旅路へと
迎つてしまつた。 Deng 熱から胃
潰瘍を併發し、遠き異郷で同僚に
みとられつつ逝いたのである。遺



骨は南方總社の久村氏が護つて三
月八日東京着の同明機で運ばれ無
言の歸還をなした。
本社ではかねて準備の別館應接
室にこれを迎へて安置、その夜六
時からしめやかな佛事をねんごら
に營み冥福を祈つた。
千葉縣から來京された御父上と
近親兩名、本社側から古野
社長、鷹嘴常務、塚本總務
局長、その他男女職員數十
名が肅然と參列し、僧侶の
讀經の後古野社長は切々胸
を打つ左掲の弔辭を讀まれた。
かくて全參列者それぞれ
れ焼香を了へて式を閉ぢた
のであつた。(寫眞は社長
の弔辭朗讀)

弔 辭

宮内くに子さん
福岡南方總社長から、あ
なたの急逝を報りされてくれ
た電報を受け取つた時の大

名古屋支社 所在區改稱

名古屋支社所在地の中區は先頃
「榮區」と改稱された。

二 支 局 移 轉

パリックババン支局及び山口支
局は左に移轉した。
一、パリックババン支局
(新所在地)
パリックババン市常盤通七號
一、山口支局
(新所在地)
山口市道場門前五番地

タイピン支局所在地

馬來ペラ州タイピン市に開設、
二月一日より業務を開始したタイ
ピン支局の所在地は左のごとくで
ある。(前號第二頁下段記事參照)
タイピン市クロスストリート四
タイピン支局

輝く武勳 我が社九氏恩賞 の光榮に浴す

支那事變に際し皇軍に協力、功
勞あつた我が社古野社長以下八氏

きな打撃は私の胸に受け留めやう
もありませんでした。祖国の興廢
を賭した大戦争ですから私自身の
生命も已に國家に捧げて居ります
し、又今までに多數の男子社員は
大東亞建設の礎石として英靈とな
つて歸つて來るのを迎へたこと二
度や三度ではありません。けれど
もう若い女性のあなたを門出を
送る時には、常夏の國の名もなき
花に、大和撫子の氣高き香りを移
してよとも願つたのに、蒼空しく
散らしてしまつたことは何として
も残念です。

大正七年紀元の佳節に宮内芳男
君の長女として生れたあなたは、
太平洋の怒濤を子守唄と聞きなれ
て健かに育ち、銚子高等女學校を
卒業して素直な、明るい、誇らし
き日本女性となられたのでありま
す。けれど何處か心から信頼出來
る雄々しさを、其の性格の内に深
く藏されておりました。

昭和十四年同盟に入社されてか
ら職務に精勵して、蔭日向なく働
き、同僚からは親しまれ、後輩か
らは慕はれて、眞に婦人社員の中
堅として、指導者として所屬局長
部長の信頼も深いものでした。

昨十八年の秋、南方占領地に於
て對し畏き邊りより敍勳の御沙汰
があつた旨二月二十日内閣賞勳局
並に陸海軍省より發表された。

- 勳五等雙光旭日章 松本 重治
- 勳六等單光旭日章 佐々木健兒
- 勳六等瑞寶章 古野伊之助
- 勳六等瑞寶章 三輪 武久
- 同 中村 農夫
- 同 神子島梧郎
- 同 松方義三郎
- 同 樋口 憲吉
- 同 中村 伸康
- 勳八等白色桐葉章 中村 伸康
- 勳八等瑞寶章 中村 伸康

ける我が同盟の大飛躍に伴つて昭
南の總局が手薄となるや、あなた
は率先して南方行を志願し、色々
な御事情で反對された御両親を説
得して勇んで赴任されました。曠
古の大戦争に生れ合せて、女なが
らも祖國に報いやうと考へられた
のも、やはり性格の底にひそんで
いた雄々しさの發露だつたのでせ
う。「自分が行かなければ他の人
にも勧められませんか。長い間御世
話になつた通信社に御恩返しをさ
せて下さい」、あなたは御両親に
願はれたとか。

宮内くに子さん。
けれども私がこの報告を聞いた
のは同盟の第一線、昭南の總局で
あなたの若い肉體を Deng 熱のた
めに奪はれてしまつたあとだつた
のです。私の心は重ねて大きな悲
しみに閉ざされ、こぼれ落ちる涙を
抑へ得ませんでした。併し胸の中
に、何だか明るいものを感じて
來たのです。世界の運命をかけた
大東亞戦争、男子は盡く第一線に
送つて、後方は女で支へなくては
ならぬ日が、やがて近づいて來ま
す。

同盟も今後女子社員の負擔が段
々大きくなつて、社の中堅を女子
で固めるやうになるかも知れませ
ん。日本女性は結婚前のひまつぶ
しに働いてみるといふやうな考へ
を綺麗に脱ぎ棄てて、たとへば
とつて戦線に立たずとも、心構へ
はアツツに、ガマルカナルに玉碎
した皇軍將兵のそれと何等の差が
あつてもなりません。日本女性は
果して此の心構へが出来てゐるで
せうか。

宮内くに子さん。
あなたの死は實に疎かな回答を
これに與へて下さいました。私は
あなたの美しい眸が、永久に閉ぢ
てしまつたとはどうしても信じら

出版部だより

△ながらく廣告のみにをはつてあ
る本社内經部編になる「圖說南方
共榮圈」は漸くさきさき出る出來あ
り、現在發賣中につき御希望の向
は至急お申込みください。A5判
三七八頁、價三圓二錢。
△次に、企畫院研究會の手になる
「國策會社の本質と機能」(B6判
二六六頁、價一圓四七錢)が最近
製本完了、三月十一日より發賣中
です。

△米英を中心と敵國の現勢を、本
社外經部苦心の蒐集資料にもとづ
き圖說した「圖說敵國現勢」(B5
判二七〇頁、價四圓三六錢)の製
本完了も間近、三月下旬には發
賣が出来るはずで。

れませんか。あなたはやつぱり生き
てゐます。
さうして今後益々重い任務を課
せられて行くべき同盟女子社員の
先頭に立つて、過ぎし日の如く同
僚を勵まし、後輩を導いて行かれ
るでせう。

あなたが出發に際して御両親に
願はれた言葉は、今後幾多の同盟
女子職員によつて繰り返さるべき
金玉の文字です。女子職員のみで
はありません。男子社員も、否我
々にも片時も忘れることの出來な
い金言です。私自身も必ず五千の
同志の先頭に立つて、あなたの後
に續きます。
宮内くに子さん。
あなたの永生を信じる私は、今
あなたの爲に弔辭を讀む氣にはな
りませんが、世間告別の禮にはな
りませんが、世間告別の御靈に誓ふ
言葉をのべて弔辭と致します。
昭和十九年三月八日
社団法人同盟通信社
社長 古野伊之助

香川邦彦氏戦死

△發賣は四月中旬頃になるかと思
ひますが、大日本言論報國會編に
なる「大東亞共同宣言」(B6判
三〇〇頁、價一圓五八錢)を近刊
としてここにお知らせしておきま
す。題目と執筆陣は次の通りです。
共存共榮の原則(齋藤忠)、獨立親
和の原則(大串現夫)、文化昂揚
の原則(齋藤响)、經濟繁榮の原則
(作田莊一)、世界進運貢獻の原則
(白鳥敏夫)
△軍需省、運通省、農商省の新設
軍需會社法の實施による決戦軍需
生産體制の全貌を、行政體制、企
業體制、勤勞體制、價格體制の諸
側面から綜合的に闡明した企畫院
研究會者の「生産體制の革新」(B
6判一八六頁、價一圓〇三錢)は、
大方の期待をうけてゐますが、い
よいよこの三月中旬を期して發賣
されます。

大阪支社勤務社員香川邦彦氏は
昭和十五年六月應召、各地に轉戦
しその後南方派遣軍に屬し數々の
武勳を樹てたが去る二月二十八日
ビルマ戦線ブチドンにおいて名譽
の戦死を遂げられた。享年三十二。

前線だより
ビルマ派遣隊第三八九三
部隊伊藤隊
末木 一郎

社報第七十三號(十月號)を有
難く拜受致しました。「總員戰闘
配置につけ」古野社長殿の御訓示
に、決意堅き同盟同志の練が彌は
れ何ともいへぬ感激に打たれまし
た。大屋氏の南方視察記の中ビル
マの〇〇支社の記事は地元だけに
興味深く、また御苦勞を謝しつつ
拜讀しました。皆様方の御健康を
御祈り申し上げます。早々。(昭和
十八年十二月十四日附社報係宛)